ラブカクテルス その15

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス　その１５

【Ｎコード】

Ｎ９１３３Ｃ

【作者名】

風　雷人

【あらすじ】

今宵は少し上質なオイルがエンジンの中で焼ける香りをほんのり合わせてみました。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前は失恋バイクでございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は失恋した。
雨がひどく降っていた。
一応出ていた涙は、その雨でたぶんあまり目立たなかったはずであった。

彼は私によく言っていた。
何でそんないつも顔をうつ向かせているのか、とか、どうして何でもいいって選んだり、こだわったりしないの、とか、あまり笑わないのか、とか。
しかし、それが私だし、付き合う前から何も変わっていないはずであった。
私がそう言うと、それなら変われと言う。
私は彼だったその男に言った。

ナゼ私を好きだと言ったのか。と。
するとその男性はなんとなく。といった。
私はその人に残念でした。私はあなたの好みのタイプとは違うし、今から自分を変えるつもりもない。といった。
私はそれを振り返ることもなく、その場から去ったのだった。

決して別れたのが悲しくて泣いている訳ではなかった。
むしろ、初めの付き合い出した時から、すでに二人は合わないだろうと感じていたし、その予感通り、二人は会えば会うほど噛み合わず、知れば知るほど落ち着かない。
そう感じて次の会う約束をすること自体がとても窮屈だった。
結果的に、向こうから声を掛けてきてこんな私のどこがいいのか知りたいだけで付き合ったので、あっちも物珍しさからで、別に愛とかなんとかではなかっただろうし、私も好きだのなんだのではなかったのだった。

ではナゼ泣いていたのかと言えば、私の魅力というか、いいところというものが、またしても発見できなかったからだった。
私は平凡だ。
しかしそれが嫌いではない。
その証拠というのもおかしいが、小さい頃からこんなナチュラルな性格が好きだし、色々な人からこんな風に変えた方がいいとか、ここが駄目だから直した方がいいとか言われるが、従ったことなどはなかった。
しかし、よく父が子供の私に話てくれたのが、誰でも何か特別な才能がある。それを見つけ出せるかどうかが人生っていう旅だ。ということだった。
父は早く見つけたら、トコトンそれを楽しめばいいし、見つけられない時は見つける旅を楽しめばいい。と言ってもいたが、私はあまりに何も見つからないせいで、この頃少し疲れていたのであった。

私はため息をついて、また私の何かに出会えなかったことを悔やんだのだった。

そんな事を考えながら歩いていたその時、突然降っていた雨が止んだのだった。
それに気付いた私が足を止めたのは、川の上に架った大きな橋の真ん中辺りだった。
反対側の車線にはしばらくぶりに見た大きな虹が、夕陽を跨ぐように見事な扇を彩っていた。
私は心の中を空にされた。
綺麗だという感情までもが湧いてくるまでに時間が必要だった。
そこにカン高い音がだんだんと近づいて来るのが分かった。
それは反対車線を走って来るバイクだと気付いた。
色は夕陽に塗られて真っ赤だった。そして、私の前まで来ると、そのバイクの運転手はいきなり立ち上がり、両手を広げた。その姿は私をハッとしてギュッとさせられたのだった。
そして体を大きく伸ばしたかと思うと、素早く腰を下ろしてバイクを唸らせた。
バイクは前輪を浮かしながら凄いスピードで駆け抜けて行った。
私はそれを目の前で見せつけられ、ナゼか体が震えるほどの感動を覚えたのであった。

私はそれから、その姿が心から離れずに眠れない夜を過ごした。そして気が付くと、私は教習所という今までの私には全く縁がなかったところに座っていたのだった。
そして結局、見に来ただけの筈が書類に判を押し、翌日からバイクの免許取得へと励むこととなってしまったのだった。

初めは女の私は珍しいのかと思ったが、今はそうでもないらしく、必ずと言っていい程授業には私以外にも女性がいた。

私は免許を取ろうと思って通ってはいたが、あまりにも知識がなく、学科は苦労するハメになり、まるで高校受験でもするくらいのノリだった。
しかし、実技は意外だった。
私は今まであまり気にしていなかったが、体に絶妙なバランスというものが私の中に隠れていたのだった。
そしてもっと驚いたのは動態視力なるものだった。
見たものに対しての体へ送る命令系統がかなり充実していたらしかった。
運動なんて今まで興味もなかったせいで、自分ではそれにも気付かなかったみたいだった。教官という先生のような人は、初めはやたらにうるさかったが、その内何も言わなくなった。
周りの女性たちとも仲良くなり、ウトイバイクのこともあれこれ教えてもらい、毎日が学ぶ楽しさに溢れて充実していたのだった。

俺様の名前はドカティ。イタリア生まれのイタリア育ち。
皆は俺様のことを暴れ馬って呼ぶ。
そう、俺様はそんじょそこいらのバイクとは訳が違う。なにせ人を選ぶバイクだからな。ちょっとやそっとじゃ乗りこなせやしない。下手に触ってくる奴は皆振り落とす。それが俺様のプライドってもんだ。
そして俺様は探している。
俺様を乗りこなせる奴を。
何人かが俺様に乗ってはきたが、皆俺様に手に追えなくて手放しやがった。
でも未練はない。俺様の旅は続く。
そして今度は何の因果か、海を渡ることになった。
日本っていう国に行くらしい。
そこにはいるのだろうか？

俺様を俺様らしく乗ってくれる奴が。
まぁいい。いなければ皆振り落とすまでだ。しかし会ってみたいものだ。
昔、俺様を作ってくれたオヤッサンが言ってたっけ。
もし俺様を乗りこなせる奴が、一度跨り走り出せば、その二つは混ざり合い、風になれるって。
そんな奴がいるのだろうか？
考えるだけでもワクワクするが。
そして、いよいよ俺様は日本に降り立った。
俺様の行き先だった日本のショップは、なかなか分かる奴らが多いようだ。
俺様を見るなり歓声をあげてきやがった。
触る手付きもなかなかのものだ。
そして奴らは興奮する手で俺様のエンジンを駆けた。
俺様は長い時間の船旅の鬱憤を晴らすかのように、高らかにカン高い音を響かせてやった。
そこにいる奴らは子供のような面を並べていた。
乗りたいか？
俺様は挑発してみたが、誰も駆け出す奴はいない。
お利口だ。
そして俺様はそのショップのショーウィンドウの真ん中に飾られた。
当然だが。
他のバイクたちも珍しそうに俺様を見た。
誰もが俺様の姿にうっとりしている。
確かに日本のバイクもしっかりした造りなのは見て分かった。
しかし、やはり俺様は特別だ。
余計この中に飾られるとそう感じ、自分が誇らしと思った。

私は間もなくしてバイクの免許を取った。

あまり顔写真が気に入らなかったが、とりあえずこれで晴れてバイクに跨ることができる。
それから私は休みになると、気に入ったバイクを雑誌で見ては行ってみて跨った。
しかしなかなか自分に合うものは見つからなかった。

そして、何件かのバイク屋さんを見たついでに寄った、あるショーウィンドウに私は目を奪われたのだった。
そのバイクはあの時の夕陽色だった。
私は名前も知らないそのバイクに一目惚れしてしまった。
私はすかさず店に飛び込んで、そのバイクを指さした。すると店員たちは、私に止めろと笑いながら言ってきのだった。
私はそのバイクまでが自分をバカにしているようにも思えたのだった。
私は現金をカウンターに差し出し、値札のままそれを買い付けたのだった。
店員は目を丸くしたあと、呆れて手続きをしてくれた。

それからしばらくして、そのバイクは私のものとして納車された。
私は結局、この時初めて、このバイクに跨ることになってしまったが、後悔は感じなかった。
むしろ、ドキドキしっぱなしだったのである。
私は勢いよくエンジンを駆けた。
すると、素晴らしい音となんとも言えないオイルの香りがたまらなかった。
早速試運転をしてみると、思った以上に暴れん坊で、バイクは私を振り落としにかかってきた。
しかし、私の体はそれを押さえ付けずに流してみた。するとバイクの力が上手く分散して、私の体の一部のようにバランスを持ち、今度はそのバイクがとても乗り易く感じたのだった。

まるで作り手がどうしてこういう造りで、ここにこんな風なパーツを使ったのかや、ショックの固さ、タイヤの太さまでも、その一つ一つの理由というものが私に伝わってくる気がしたのだった。
それを理解し、使い尽くすくらいのライディングをした時に初めて私とバイクは一つになり、そして、
そして風になった気がしたのである。

私は、この時間を待っていた。
私とバイクは惰性で例の橋を走った。
私はバイクを跨いだまま立ち上がり、大きく両手を広げて身体全体を伸ばした。
そして風を掴んだ。
それから跨り直してバイクの前輪を浮かし、ウィリーをした。
いつまでも続くバイクのカン高い音を耳にしながら、私は人生の旅の始まりを向かえたことを確かめた。
やっと見つけた。と、私はヘルメットの中でニヤケた。
きっと、私とバイクは夕陽色に溶けているに違いなかった。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9133c/

ラブカクテルス その15

2011年3月10日00時35分発行